

## 「なわ張り理論」に基づく英語直示動詞 *bring* における到達点の特質

岡 良和

〈キーワード〉

① bring ② なわ張り ③ 到達点

〈論文要旨〉

英語直示動詞 *bring* の到達点は、話し手や聞き手が存在する場所であるとされている。しかしながら、この規則に従わない事例も多い。本論文では、このような例外的な事例を対象として、「なわ張り理論」の枠組みを自由間接話法や比喩的表現に援用しながら、一貫した説明を試みる。

## The Nature of the “Goal” in the English Deictic Verb “Bring” — on the Basis of the Theory of Territory

Yoshikazu OKA

〈Keywords〉

① bring ② territory ③ goal

〈Abstract〉

The “goal” of the English deictic verb “bring” is thought to be where the sender or the addressee is located. The present paper aims to clarify the extension of the “goal” of the English deictic verb “bring” in the framework of the Theory of Territory, dealing with metaphorical and metonymical expressions as well as free indirect speech.



- (2) The door opened and the children *brought* some flowers *into* the room.

上記 (2) においては、物理物である子どもたちが、物理物である花を持ち、話し手が存在する場所である物理的三次元空間である部屋の内部に、つまり話し手のなわ張りの内部に移動したという事象が表示されている。

上記 (1b) に対応する以下 (3) は、動作主が「若手」を組織という抽象的三次元空間である「党」内部に、つまり、話し手のなわ張りの内部に移動させる概念で表示されている。

- (3) *bring in* younger party members

(若手を入党させる)

— 『英和活用大辞典』 (s.v. *bring v.* 〈副詞 2〉) (下線筆者)

上記 (3) における被移動物は物理物である「若手」で、到達点は明示されていないが「党」だと考えられる。すると上記 (3) は以下 (4a-c) の過程を経て生じたと考えられる。

- (4) a. bring younger party members in (the party)  
       ↓ [(the party) が省略され、in が前置詞から副詞へ機能を変換する]  
       b. bring younger party members in  
       ↓ [in が *bring* に後置される]  
       c.= (3) bring in younger party members

映画で、*bring* + 人 + *in* が用いられている事例として、以下 (5) がある。この事例では、聞き手のなわ張り内部に話し手が移動する概念が表示されている。

- (5) 〈状況〉：復員兵フランク (Frank) が、キューバを根城にするギャング団とそのボスであるロッコ (Rocco) に事件に巻き込まれるが、隙を見て子分たちを射殺すると、ロッコが和平を申し出る。

Rocco: We'll be partners. Everything will be fifty-fifty... Is it a deal?

(我々は仲間になろう。何もかも折半しよう。…いいか?)

[返事が無いので]

You'll get rid of me and take all the money... Suppose the money is yours. Plenty more when we get to Cuba. I'll make you rich!

(おまえはおれを追い払い、金を全部とるんだろう…。金はお前のものだ。我々がキューバに着いたら金はもっとある。おれはお前を金持ちにしてやる!)

[返事がないことに苛立ち]

You'll never bring me in. Never! You figure I got a gun so you can't trust me.

(お前は絶対におれを仲間にしないうんだな。絶対に。お前はおれが銃を持っていると思っているんだろう。それでおれを信用できないんだろう。)

— *Key Largo* (下線・和訳筆者)

話し手のロッコは復員兵フランクの仲間に入れてほしいと申し出る。聞き手のフランクがいる組織が三次元空間のなわ張りとして捉えられ、その内部 (= in) に聞き手であるフランクが話し手のロッコを移動させるので bring が用いられている。

## 2. 「生む」概念表示となわ張り

上記 1. (1c) で用いられた come の他動詞として、以下 (1a-b) では、「生む」概念が bring で表示されている。

- (1) a. Many people are refusing to bring children into the world as it is so full of trouble and violence.

(世界は紛争と暴力に満ち満ちているので、子供を生むのを拒んでいる人が多い)

— 『研究社・ロングマン 句動詞英和辞典』 (s.v. bring someone into the world)

(下線筆者)

- b. bring children into the world

(子供を生む)

— 『英和活用大辞典』 (s.v. bring v. <+前置詞>) (下線筆者)

上記 (1a-b) では「子供を生む」事象が、母親が、その胎児を人間が生活している世界へ「移動させる」概念で表示されている。そして、人間が生活しているこの<sup>2</sup>世界は、話し手のなわ張りで見なされている。

人間が生存している世界が、話し手や聞き手が存在している場所として考えられているために、以下 (2) におけるように、死んだ者が生き返ることは、come back で表示される。

- (2) <状況> : 主人公に地元の人がある人物について説明する。

'...Tom Parker has always been a bit strange. He thinks that people who die in the sea will come back to life.'

(「…トム・パーカーはずっと少し変なんだ。彼は海で死んだ人たちは生き返ると信じているんだ。」)

— Aspinall (1999: 37) (下線・和訳筆者)

上記 (2) において、come で表示される「生き返る」概念が、以下 (3) のように bring でも表示される。

(3) *bring sb back to life*

(人を生き返らせる)

— 『英和活用大辞典』 (s.v. *bring v.* 〈副詞 1〉) (下線筆者)

上記 (3) では、主語の指示物が対象となる人などを「死」から「生」に移動させることが、*bring* で表示されている。生きている者たちがいる世界は、話し手や聞き手のなわ張りの範囲であるから、何らかの働きかけを行うことができる。他方、これができない世界を想定して、「あの世」と表現している。以下 (4) では、このことが表現されている。

(4) You must forget about her. No amount of grieving will *bring her back*.

(彼女のことはもう忘れないと。いくら嘆き悲しんでも彼女は生き返らないんだから)

— 『動詞を使いこなすための英和活用辞典』 (s.v. *bring back*) (下線筆者)

以下 (5a-b) では、「非存在」から「存在」へと状態が変化する事象が、抽象的三次元空間としての「存在 (being, existence)」内部への被移動物の移動として表示される。(5a-b) では存在内部に移動する前に、被移動物が存在するかのように捉えられているが、非物理的な組織である「国」や「委員会」が、存在状態に移行する前に存在しているわけではないので、以下 (5a-b) は、「存在のメタファー (ontological metaphors)」に基づき、子どものような物理物が物理的三次元空間内部に移動する表現から拡張された表現と考えることができる。

(5) a. Another new nation has been *brought into being*.

(新しい国がまたひとつ誕生した)

— 『研究社・ロングマン 句動詞英和辞典』 (s.v. *bring into 2*) (下線筆者)

b. A new committee was *brought into being* to consider the problem.

(この問題を検討するために新しい委員会が作られた)

— 『英和活用大辞典』 (s.v. *bring v.* 〈+前置詞〉) (下線筆者)

上記 (5a-b) においては、国や委員会という組織は、それらを構成する物理物としての人間の存在を前提とするので、メトニミーとしての物理物の移動として捉えられる。これに対して、以下 (6) では、被移動物が「思考法」という抽象物であり、その抽象物が物理物として捉えられたうえで、抽象的三次元空間である「存在」内部に移動する事象として表示されている。

(6) Newton's discoveries *brought* utterly new ways of thought *into being* [existence].

(ニュートンの発見がまったく新たな思考法を成立させた)

— 『英和活用大辞典』 (s.v. bring v. 〈+ 前置詞〉) (下線筆者)

上記 (6) では、新たな思考法が成立することで、話し手を含む、この世に存在している人々が、何らかの影響を受けるということが示されている。このことから、新たな思考法がなわ張り内部に移動するという概念で捉えられるために bring が用いられている。他方、なわ張りの内部に移動させた動作主が要求される。そこで、ニュートンがある自然法則を発見したという「コト的」事象が、「ニュートンの発見」として「モノ的」に名詞化されることで、あたかも物理物であるかのように捉えられる。つまり、「原因と結果」の関係が、動作主と見なされた「ニュートンの発見」が、被動作主と見なされた「新たな思考法」を、なわ張り内部に移動させたと表現されている。

原因と結果を移動概念で捉えることは、英語においても一般的である。以下 (7a-d) のように、Lakoff and Johnson (1999: 180) では、「出来事-構造メタファー (event-structure metaphors)」が指摘されている。

(7) a. States Are Locations (interiors of bounded regions in space)

(状態は位置である (空間内部で区切られた領域の内部))

b. Changes Are Movements (into or out of bounded regions)

(変化は運動である (区切られた領域の中へ、あるいはその外へ))

c. Causes Are Forces

(原因は力である)

d. Causation Is Forced Movement (from one location to another)

(因果は強いられた動きである (一つの位置からもう一つ別の位置へ))

— Lakoff and Johnson (1999: 186) (和訳筆者)

上記 (7a-d) を上記 (5a-b) に適用すると、「非存在の状態」であった国や委員会が、関係者の「力」により、「存在の状態」へ「移動」させられた、ということになる。

### 3. なわ張り概念の拡張

小説などでは、以下 (1) のように、come の主語の指示物の到達点に、話し手や聞き手が存在しない事例も多く見られる。

(1) The girl  $\left\{ \begin{array}{l} \text{came} \\ \text{went} \end{array} \right\}$  to her mother's bedside.

このことは以下 (2) のように bring にも該当する。

- (2) The girl { brought } some flowers to her mother's bedside.  
          { took        }

上記 (1)-(2) において、発話時もしくは主語の指示物の到達時に、到達点には話し手や聞き手は存在しないが、到達点の her mother's bedside に、話し手が存在している印象を受ける。つまり、広い意味で話し手や聞き手が存在している場所が、come や bring の主語の指示物の到達点となる。主語の指示物の到達点に、実際に語り手 (= 話し手) が存在していると仮定すれば、the girl の指示物はその語り手の方へ向かって来る事象として、上記 (1)-(2) を捉えることができるのである。

上記 (1) については、以下 (3) のように記載されている。

- (3) In pure third-person discourse (i.e., in discourse in which the identity and location of the Sender and the Addressee plays no role), the narrator is free to choose a point of view, such that movement toward the place or person whose point of view is assumed can be expressed with the verb COME.

(純粹に三人称の談話において (すなわち、送信者や受信者の立場や場所が何らの役割も持たない談話において) 語り手は自由に視点を選択することができる、そして視点がとられた場所や人に向かう移動は動詞 COME で表示され得る。)

— Fillmore (1971: 377) (和訳筆者)

上記 (3) の記載は、上記 (2) の bring にも該当する。

以下 (4) の小説からの事例では、bring が用いられることで、語り手がパトカーの内部にいるように描かれている。

- (4) 〈状況〉：刑事がパトカーでの捜査を終える。

Grant turned off the light and brought it inside the car again.

(グラントはライトを消してそれを再び車の中に入れた。)

— MacAndrew (2001: 36) (下線・和訳筆者)

以上の事例は、話し手が自分のなわ張りを拡張する傾向として理解することができる。以下 (5) の自由直接話法の事例もこのことを傍証している。

- (5) I sat on the grass staring at the passers-by. Everybody seemed in a hurry. Why can't I have something to rush to?

(私は芝生に座って通行人をじっと見つめていた。誰もが急いでいるように見えた。どうして私には飛びつくものが持てないのだろうか?)

— Quirk et al. (1985: 1032) (下線・和訳筆者)

上記 (5) において、語り手は発話時 (現在) ではなく、伝達時 (過去) に身を置いて、心情を述べているために、下線部は時制の一致を受けていない。このように、話し手が心理的に過去時に存在することも、なわ張りの拡張の一つと言えるであろう。

#### 4. 間接的な伝達における到達点

語り手や話し手の場面内部への移動、すなわちなわ張りの拡張という考えを進めることで、以下 (1a-c) のような come に関する事例が説明される。

- (1) a. Tell him I'll come right over.
- b. She asked Fred to come to her party.
- c. She asked Fred if I could come to his party.

— Fillmore (1971: 375) (下線筆者)

上記 (1a-c) については、以下 (2) のように記載されている。

- (2) COME is appropriate if the conditions (B) through (D)<sup>3</sup> are assumed satisfied by the Sender or the Addressee of a reported communication act and the 'coding time' is taken to be the time of the reported communication act.  
( (B) から (D) の条件が伝達行為の送信者もしくは受信者によって満たされると考えられ、発話時が伝達行為時と見なされる場合に、COME は適切となる。 )

— Fillmore (1971: 375) (和訳筆者)

Come と同様に bring についても以下 (3a-c) のような事例がある。

- (3) a. Tell him I'll bring some flowers right over.
- b. She asked Fred to bring some flowers to her party.
- c. She asked Fred if I could bring some flowers to his party.

上記 (3a-c) は、現在の時点から、この内容が伝えられた時点に、話し手が心理的に移動した (つまり、なわ張りを拡張した) と捉えれば、その伝達形式は、以下 (4a-c) のような直接話法から間接話法への転換となる。

- (4) a. S(he)'ll bring some flowers right over to you.
- b. Bring some flowers to my party, please.
- c. Can s(he) bring some flowers to your party?

上記 (4a-c) の直接話法から上記 (3a-c) の間接話法へと形式がより複雑になっていること

から、上記 (4a-c) から上記 (3a-c) に *bring* の概念が拡張されたと考えることができる。

#### おわりに

以上、主に *bring* を対象にして、動作主（主語の指示物）と被動作主（目的語の指示物）の到達点について、「なわ張り」の視点から一貫した説明を試みた。典型的な事例や「非存在」から「存在」への状態の変化については「なわ張り」がそのまま適用されること、さらに、間接表現の場合には「なわ張り」の拡張で説明されることを示唆した。

#### 註

1. 「なわ張り」については、神尾（1990）および神尾（2002）を参照。
2. 日本語の「これ」は話し手のなわ張りを、「それ」は聞き手のなわ張りを、「あれ」は話し手や聞き手以外のなわ張りを表示する。このことは、以下 (1a-b) から明らかである。
  - (1) a. 人間が生活しているこの世界
  - b. \*人間が生活しているあの世界
3. (B)-(D) は以下の通りである。
 

(B) For COME, it is assumed

  - (i) that the Sender is at the Goal at coding time;
  - (ii) that the Sender is at the Goal at arrival time;
  - (iii) that the Addressee is at the Goal at coding time;
  - (iv) that the Addressee is at the Goal at arrival time.

(COME に対しては以下が想定される。(i) 発話時に発信者が到達点にいること (ii) 主語の指示物の到達時に発信者が到達点にいること (iii) 発話時に受信者が到達点にいること (iv) 主語の指示物の到達時に受信者が到達点にいること)

(C) For COME, it may also be assumed

  - (i) that the Goal is a 'proper location' for Sender at arrival time; or
  - (ii) that the Goal is a 'proper location' for Addressee at arrival time.

(COME に対しては以下が想定される。(i) 主語の指示物の到達時に到達点が発信者にとって「適切な場所」であること、もしくは (ii) 主語の指示物の到達時に到達点を受信者にとって「適切な場所」であること)

(D) For COME, it may also be assumed

  - (i) that the Sender is making the same journey; or
  - (ii) that the Addressee is making the same journey.

(COME に対しては以下が想定される。(i) 送信者が受信者に同伴すること、もしくは (ii) 受信者が送信者に同伴すること。)

— Fillmore (1971: 371)

(下線部・和訳筆者)

#### 参考文献

- Aspinall, P. (1999) *The House by the Sea*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Azuma, N. et al. (trans. eds.) (東信行他訳編) (1994) 『研究社・ロングマン 句動詞英和辞典』 東京：研究社.
- Fillmore, C. J. (1971) "How to Know whether You're Coming or Going." In Hyldgaard-Jensen, K. (ed.) *Linguistik 1971*. Frankfurt: Athenaum, 369-379.
- Ichikawa, S. et al. (eds.) (市川繁治朗他編) (1995) 『英和活用大辞典』 東京：研究社.
- Kamio, A. (神尾昭雄) (1990) 『情報のなわ張り理論』 東京：大修館書店.

Kamio, A. (神尾昭雄) (2002) 『続・情報のなわ張り理論』 東京：大修館書店.

Lakoff, G. and M. Johnson. (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*.  
New York: Basic Books.

MacAndrew, R. (2001) *A Puzzle for Logan*. Cambridge: Cambridge University Press.

McCaleb, J. and T. McCaleb (eds.) (マケーレブ・ジャン、マケーレブ恒子編) (2006) 『動詞を使いこなすための英  
和活用辞典』 東京：朝日出版社.

Quirk, R., et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

#### 映画

*Key Largo* (邦題：『キー・ラーゴ』) (1948, 米, Entertainment Co., Time Warner Company.)

岡 良和 人間環境大学教授 (英語コミュニケーション論)